

Mさんの涙

宮城県登米市立中田中学校

二年 及川 萌

私が彼女の涙を見たのは初めてだった。なんて悲しい表彰台だろう。同じ「入賞」というくくりでありながら、数十センチ隣に並ぶ者は東北大会への切符を手にし、その勝者との距離よりもっと短い、わずか一センチの差で私の憧れの彼女は敗れた。何も声をかけられない私は、黙って競技場を後にした。

私が陸上競技を始めたのは小学三年生。何となく走るのが好きだったという単純な理由で地元のスポーツ少年団に入会した。そこで知り合ったのがMさん。違う小学校で学年も一つ上だったが私たちは仲良くなった。私は百メートル、Mさんは走り幅跳びを選び、練習、大会と一緒に月日を重ねていった。陸上の話だけでなく、学校や勉強、友達のこと。たくさんおしゃべりした私たちは決してライバルではなく「仲間」だった。

小学生時代の私はそこそこの結果を出せた。各大会ではほぼ毎回賞状を手にすることができ、市内でも敵はいなかった。気まぐれで八百メートルや幅跳びに参加したりもしていた。反対にMさんは走り幅跳び一直線で自宅の庭には専用の練習砂場も作り、ただひたすらに跳び続けた。それでも表彰台にのる時もあればそうでない時もある。踏切線で赤旗が上

がるのを見るたび、「Mちゃんも別の種目もやってみればいいのに」と思う時さえあった。

Mさんは中学での部活動が始まり、少しずつ飛距離がのび、さらには私より遅かったはずの百メートルでも私の記録を抜いた頃、私は伸び悩んでいた。以前のようには表彰台には上がるものの、タイムはちっとも縮まらない。自分より速い子はどんどん速くなって差は広がる一方で、今まで余裕で勝てた別チームの子がすぐ後ろに迫ってきた。表彰台の常連からすべり落ちることを恐れた私は、小学最後の大会で専門の百メートルではなく、ハードルでの出場を決めた。もちろん付け焼き刃の技術では到底満足な走りはずいぶん、これまで築いたものを消してしまふかのようなひどいレースは惨めで、悔し涙さえも出なかった。

中学に入学し、陸上部員として大会に出る頃には、Mさんとの差は歴然としていた。県大会でも上位の常連となっていた彼女とは逆に、過去に負けたことがなかった面々はすでに私より速く、私は一人だけ決勝へ駒を進められなかった。何をどうすれば良いか分からず焦り、もがき、苦しんだ。そして周りの人たちの「昔は速かったんだけどね」という哀れみにも似た言葉を耳にするようになった頃、私は再び現実から逃げるように二百メートルや幅跳びと別種目に手を出し始めたのである。後ろめたさは、逃げたのではなく他の可能性を探すという都合の良い言葉でかき消した。ただ、幅跳びは単純に面白かった。母には、毎日靴下が真っ黒になると嫌な顔をされたが、この地域にはMさんという絶対王者がいるから勝てなくても仕方ないという気楽さの反面、仰け反った体が大きく弧を描いて飛んでいく、Mさんの跳躍姿の美しさへの憧れがいつも頭にちらつき、「私もMちゃんのように跳びたい」という思いも芽生え

てきたのである。それは、いつも高い場所で賞状を手にする彼女への憧れでもあり、同時にいつのまにか置き去りにされた彼女に追いつきたいという焦りだったのかもしれない。

市の大会で他者を寄せ付けず優勝した彼女を私は低い位置から眺めた。観客席から応援した県大会も、五メートル超を跳び、二位という成績で予選を通過した彼女はとても輝いていた。しかし翌日の決勝という舞台で彼女は失速した。予選同様の記録なら確実に東北大会に行けるのに、赤旗が上がるたび嫌な汗が体を伝い、喉がカラカラになった。「頑張れ！」私の憧れるMさんのジャンプはあんなものじゃない……。確実と思われていた東北大会行きの切符は一センチの差で滑り落ちた。彼女の目から流れる大粒の涙。それは努力してきた証であり、昔から一心不乱に砂と向き合ってきた彼女の姿が頭に浮かぶ。同時に、努力もせず嫌なことから逃げていた私は涙を流すことはあるだろうかと思わなくなった。あんなに努力してきた彼女が乗り越えられなかった壁を自分が越えられるとは思わない。でも、確かに自分の中で陸上への熱量が変わるのを感じた。私は、その日のうちに、自主練習用のミニハードルとラダーを注文し、気まぐれでやっていた腹筋も毎日の回数を決めた。先生に「私は幅跳びをやります」と宣言した。私はもう逃げない。一つの道を極めるのだ。Mさんの涙で私は私の弱さを自覚し険しい道を選ぶことを決めた。

きつとこれからもMさんの走り幅跳びへの情熱は変わらない、むしろさらに上を目指していくだろう。私は彼女のように美しく、そして強くなりたい。いつか同じ舞台でMさんにライバルと思ってもらえるように……。